新聞種と小説

— 明治十年代の時事小説について —

松 原 真

—

明治十年代、とくにその前半は、新聞雑報を原拠として小説が盛んに制作されていた時代である。

文学史の通説にある通り、久保田彦作^{とりおひ おまつかいじやうしん わ}『鳥追阿松海上新話』(明十一、錦栄堂)により、小説(草双紙)出版は復活を果たした。本作は「温故知新の大実録」(初編序)をうたっていたが、それは実学思想に染められていた当時、虚構ではなく事実であることを読者に訴える必要があったためである⁽¹⁾。それから数年間、「何でも彼でも実説^{か じつせつ}——(其僻嘘^{そのくせうそ}が沢山^{たくさん})と実説振ねば売^{じつせつぶら}ず成^{うれ}りし」(伊東橋塘^{なん}『名立浪竜神於珠』初編序、明十八)という状況が続く。従来、公刊をはばかられていた事実をめぐる小説は、明治期に入り、小説出版の主役へと躍り出たのである。そして、事実であることを前面に押し出さねば売れないというとき、商品としての小説が自らの事実らしさを確保するための拠りどころとしたのが、当時勃興していた新聞というメディアであった。

- 今世の草紙物語^{いまのよ さう しものがたり}などいへるハ。おもに新聞紙^{しんぶんし}を基^{もと}とし(松林伯円『今常盤布施譚』二編序、明十二)
- 草双紙^{くさそうし}なるものハ往時赤本^{わうじあかほん}より起りて浮草^{うきくさ}の根なし言^{こと}而已多^{ミおほ}かりしに方今ハ正史^{ほうこん せい}に因りて編輯^しなすこと故各社の新聞^{へんしふ}を拔萃^{ゆゑかくしや しんぶん はつずる}し(松林伯円『新編伊香保土産』三編序、明十二)
- 新聞紙中より拔萃する合巻ものゝ流行するハ昔々と陳腐に空言を加味して出来上がりし品と違ひ新奇にして実事を集めし物なれハならん(孤蝶園若菜『長脇差小鉄乃利刀』前編序、明十六)

「昔々と陳腐に空言を加味して出来上がりし品」が拒絶され、「実事」に基づく小説が求められるようになったとき、新聞雑報こそが小説の材源となったのである。そもそも同時期、小新聞と呼ばれる庶民層向けのメディアには、雑報記事を物語的に長編化したいわゆる続き物が大量に掲載されていた。これもまた時事小説と見なせるのであって——続き物を単行本化した例も多い——、明治十年代とはまさに時事小説の時代なのである⁽²⁾。

では、新聞種が小説の主要な原拠となっていた時代、小説はどのような論理のもとで成立していたのだろうか。言い換えれば、新聞雑報に掲載されるような実際の事件を素材に選ぶとき、小説制作の現場にはどのような共通認識が働いていたのか。本稿ではこれを問題とする⁽³⁾。

二

最初に彩霞園柳香^{むしろばたぐんまのいなき}『むしろばたぐんまのいなき 蓆旗群馬嘶』(明十四、金松堂)を取り上げたい。これは同時代の農民暴動事件に取材した小説である。まず本作の梗概を記しておく。なお、どこまで史実を伝えているかは本稿では問わないこととする(以下おなじ)。

群馬県下西群馬郡榛名山麓。事の発端は地租改正に伴う明治九年の丈量測定であった。このとき旧幕時代より八一箇村の入会地であった中野秣場の一部が、松の沢村単独の官有地となる。明治十一年、部分木条例(植林奨励策)が出されると、松の沢村は先ほどの官有地への植林を県に申請し、翌年許可され標杭を建てる。これに反撥した松の沢村民以外の農民千余名が明治十三年十月に集合、松の沢村の部分木を一方的に伐採する。この騒擾の中心人物となったのが真塩紋弥であった。十一月、一旦和睦が整い、松の沢村は上述の村内官有地を取り消すこととなる。松の沢村民はこれに不服であり、破約を画策して代言人を雇ったり、真塩らの悪評を立てたりする。ところが明治十四年一月、郡役所より今度は中野秣場全体を官有地とする判断が下される。中野秣場が高崎士族に開墾地として下付されるなどといった噂が飛び交い、農民達は動揺し、県庁を激しく恨み、二千余名が集合する。真塩紋弥が制するも、ついに大規模な暴動が起きる。真塩は嘆願書をしたため、身を犠牲にして内務省に直訴しようとするが、途中で願意叶わぬことを悟り自首する。

本作がどのような論理にしたがって成立しているのかを考えたい。これに際し、おなじく同時代の農民暴動事件を扱った時事小説、伊東市太郎『相州まどのつきたいみのまつ奇談真土迺月暈之松蔭』(明十三、伊藤市太郎刊)を参照する⁽⁴⁾。以下に農民達が暴動に至るまでの本作の梗概を記す。

神奈川県下相模国大住郡真土村。事の発端は明治五年の壬申地券発行であった。このとき村の有力者であり質取主であった戸長松木長右衛門が、慣例に従って返金さえすれば質取地を元の持ち主である農民に返還すると嘘を吐き、証書を取ったうえで質取地を自分名義のものとする。先祖代々の土地を松木に掠奪されたと気付いた農民達は明治九年、小田原駅警察署にその旨を訴え出る。この訴えの中心人物となったのが冠弥右衛門であった。冠らの主張が認められる判断が出されるが、松木が承服しないため、冠らは横浜裁判所にて民事訴訟を起こす。結果は明治十一年四月、冠らの勝訴となった。だが喜びも束の間、同年六月に松木が東京上等裁判所に控訴、地券発行の際の証書が決定的証拠となり、今度は農民達が敗訴となってしまふ。松木はさらに、明治九年から十一年までの三年間の小作滞り総計千六百円及び訴訟入費千七百円を農民達に請求し、小田原区裁判所に訴え認められる。大審院に上告する経費の残っていない冠らは、暴発しそうな農民達を制し司法省へ直訴。しかし、司法省はこれを却下する。万策尽きた冠らは明治十一年十月、ついに怨敵を討つ決意をし、松木邸を襲撃・放火したうえで一家を惨殺する。

本作は『蓆簾群馬嘶』の前年に出版され、好評であった。たとえば、明治戯作の代表作のひとつとして文学史に挙げられる武田交来『かわりのまつまどのよあらし冠松真土夜暴動』(明十三、錦寿堂)は本作を直接的な原拠としており、このことも本作の当時の好評を示す。

先行の『真土迺月暈之松蔭』が好評であった以上、『蓆簾群馬嘶』がこれと内容的に似通うのは無理もない。実際、個々の設定に違いが見られるものの、両作は多くの点で共通している。まず、事件の発端となるのは、地租改正法(明治六年七月太政官布告)を典型とする明治政府の土地政策である。その政府側の法令に便乗し、旧来の慣習を破って利益を独占しようとする者(松の沢村民、松木長右衛門)が出てくる。これに対し、農民達は代表者(真塩紋弥、冠弥右衛門)を立てて抗議し、旧来の慣習に戻すよう主張する。しかし、明治政府系の公的機関(県庁他、裁判所)は、農民達の意向を無視し一方的な判断を下す。結果、動揺した農民達は切羽

詰まって暴動に及んでしまう。両作ともに以上のような物語が展開される。

また、事件の中心人物が義民的である点も共通する。真塩紋弥も冠弥右衛門も、暴動をできるだけ抑えようとしたり、中央政府（内務省、司法省）に直訴しようとしたり、梗概には記していないが直訴に伴い妻子別れの愁嘆場を演じたりと、自らを犠牲にして問題解決に尽力する。

だが、本稿の問題としたいのは両作の違いの方である。両作は事件に対する態度において決定的に異なるのだ。この点を本文に依りつつ具体的に検討してみたい。『蓆簾群馬嘶』が事件に関与した農民をどのように描いているか、分かる箇所を挙げる。

- 無智朦昧のむちもうまい小百姓こひやくしやう折々おりへ真塩ましほが所存しよぜんを聞きしに（初編上）
- 中野原野なかのげんやへ集合しふがふせし頑民ぐわんみん共どもハ警部けいぶ巡査じゆんさが制せいする辞ことばを耳みみにも入れいず（初編中）
- 頑民くわんみんハ中々なかへ退散たいさんする色いろなく（三編中）

このように、本作において暴動を起こした農民は「無智朦昧の小百姓」「頑民共」と否定的に表現される。暴力行為に及ぶ農民は「頑民」すなわち「時勢を弁ぜぬ頑固の民」（三編中）にほかならないというわけだ。彼らを「暴徒」とする箇所もある（同前）。

しかし、前述のように、事件の中心人物については総じて義民的に描かれる。『蓆簾群馬嘶』が真塩紋弥をどのように描いているか、分かる箇所を挙げる。

- 流石きすがの紋もん弥やも恩愛おんあいの別わかれを惜をしむはらなみだ涙（三編中）
- (妻子と別れた後、真塩紋弥が一松原注) 涙なみだをおさへ思おもひきつてぞ立たち出いでしハ佐倉さくらの昔むかし岩橋いはしの渡わたり兼かねたる愛別離あいべつり苦くも斯かくありしかと思おもひしなるべし（三編下）

佐倉宗吾劇を思わせる妻子別れの場面が挿入され、事件の中心人物の心情が涙とともに描かれる。明治十年代、佐倉宗吾の義民伝は多く出版されていた。当時の人びとが慣れ親しんだ義民伝の文脈に沿って、柳香は真塩紋弥を描いているのである。このとき真塩は、余儀なく事件の中心人物となった、同情の余地ある人物となる。

このように、『蓆簾群馬嘶』は暴動を起こした農民達を否定的に描き出すと同時に、事件の中心人物を義民的に描くという両義的な書き方をしている。暴動を批判的に描きたいのか、義民伝を同情的に描きたいのかははっきりせず、事件全体への態

度が曖昧なものとなってしまっているのだ⁽⁵⁾。しかし、注目すべきことに、『真土 迺月 豊之松蔭』の方にはこの曖昧さが全くないのである。本作の本文冒頭を引用する。

ほんべんさうしゅう きだん だい かな がわけん かさかみのくにをほすミゴをりしん どむら ところ おこ
 本編相州奇談と題せるハ神奈川県下相模国大住郡真土村といへる所に起りた
 いちだいそうたう いつ こ ぐ じん そんみん ふんまんしの にじうろくめい いう
 る一大争闘にして一個の愚人のために村民の憤懣忍ぶによしなく廿六名の有
 ししやせんそん すにん しんめい かわ こと おこ ぎ すぎ ぼう つひ このすめい ぎしや
 志者全村数人の身命に代りて事を発し義に過て暴にわたり終に該数名の義者ハ
 けいじやう かばね までたちいたり
 刑場に屍をさらさんと迄立到しを（後略）（初編）

ここには『蓆簾群馬嘶』に見られた曖昧さは見られない。事件の中心人物だけではなく、暴動を起こした農民全てが「義者」とされ、称賛の対象となっている。これと同様に、初編序にも「冠らの義者が衆命に代つて奮起し」とあるし、後出の五編序にも「冠ガ義拳ニ加担ノ同志」とある。すなわち、『真土迺月 豊之松蔭』は全編を通じて、この農民暴動事件——真土事件と呼ばれる——に対して肯定的なイメージしか持っていないのだ。いったいなぜ、『蓆簾群馬嘶』と『真土迺月 豊之松蔭』と、事件に対する態度はこうも違っているのだろうか。

三

確認しておきたいのは、両作の違いの原因を『蓆簾群馬嘶』作者彩霞園柳香の資質に帰すことはできないということである。つまり、柳香は農民暴動一般に対し本来的に曖昧な考えの持ち主だったとすることはできない。というのも、柳香は『真土迺月 豊之松蔭』の素材である事件に対してはきわめて同情的であるからである。本作には柳香による序文が付されている。以下に引用する。

テン ナセ ワザワイ ノガ ミヅカ ナセ ワザワイ ノガ ガタ ムカシ〜ヂイバ、 ネ ノノガタリ
 天ノ作ル災害ハ遁ルベシ躬ラ作ル禍害ハ逃レ難シトハ昔々爺媼カラ寝物語ノ
 キ〜トリガクモンズグ マツ キ ガウヨクミヅカ マネ ワザワイ カムリ ギキョ カタン ドウシタカハシ
 聞取学文直ニハアラヌ松木ガ強慾躬ラ招ク禍害ノ冠ガ義拳ニ加担ノ同志高橋
 イトラ テン カハ マツ キイツカ シユウサツ クニ オキテ マヌ レンルイヒトヤ ツナ
 伊藤等天ニ代リ松木一家ヲ襲殺スルモ国ノ控ハ免ガレズ連累圍圀ニ繋ガレテ
 ザンザイ センコク カウムリ モトコ シヨク イデ シエン イデ イツソシウミン イケニエ フシゲキ
 斬罪ノ宣告ヲ蒙シモ元之レ私慾ニ出ズ私怨ニ出ズ一村衆民ノ犠牲トナツテ奮激
 コ、 イタ
 茲ニ至リシナレバ（五編序）

このように柳香は真土事件に対して強く肯定的である。事件全体を「一村衆民ノ犠

牲トナツテ」起こされた「義拳」とするのだ。したがって、柳香の資質に事件への態度の違いの原因を見出すことはできない。『蓆簾群馬嘶』と『真土迺月暈之松蔭』と、農民暴動事件への態度はどうして違っているのか、この謎を解く手掛かりは、おそらく『蓆簾群馬嘶』の本文末尾にある。

直様警祝第二局へ護送となり同局にて一応取調への上群馬県へおくりになつ
 たるハ維四月上旬の事にして暴動の顛末ハ目今お調べ中なれば不日落着になる
 べしと聞ゆ（後略）（三編下）

これは、真塩紋弥が内務省に直訴をしようとするも諦めて自首したという場面が続く箇所である。重要なのは、本作が裁判所の判決の前に出版されているという点である。つまり、『蓆簾群馬嘶』の事件は出版当時まだ取調中だったのであり、裁判所はいかなる結論も出していない状態であった。

その一方、『真土迺月暈之松蔭』の場合はどうだったのか。柳香の序文に再び戻り、先ほど引用した箇所の続きを引用する。

其身ヲ殺シテ邪曲ヲ掃フ義胆ハ曇ラヌ明治ノ聖代遂ニ特典ノ沙汰アツテ死一
 等ヲ減ゼラレシハ終身苦役ノ庭ニアツテ自由ノ呼吸ハナサズト雖モ首足ヲ異ニ
 スルヲ遁レ永ク義拳ノ名ヲ遺留又幸榮トモ謂ツ可キ而已

分かるように、『真土迺月暈之松蔭』は、裁判所が「事情憫諒すべき者あるに付」（『真土迺月暈之松蔭』五編に引用された判決文）事件の中心人物らに減刑の宣告をした後に出版されているのである。真土事件では、彼らは一端斬罪刑を宣告されるも、その後、特典により罪一等を減ぜられ終身刑となった。

これが、『蓆簾群馬嘶』と『真土迺月暈之松蔭』と、事件に対する態度の違いの大きな原因であると考えられる。彩霞園柳香は真土事件の場合、特典という政府または裁判所のお墨付きがあるためにいわば安心してこれを称賛できる。しかし、『蓆簾群馬嘶』の事件の場合はそうはいかない。おそらく、柳香は真土事件とおなじように農民側に同情の余地があると感じていたのだろう。そして、彼は売上を意識して『真土迺月暈之松蔭』や伝統的な義民伝とおなじような内容にしたいと思ったのだろう。だから事件の中心人物を義民的に描く。しかし、暴動を起こしている以上、農民達は明治政府により処罰される運命にある。つまり、来るべき裁判所の

判決は事件を断罪するものになる。だから事件全体を肯定するわけにはいかない。このような互いに相反する論理が働いた結果、『蓆簾群馬嘶』は事件に対し煮え切らない曖昧な態度をとる内容になったのである。

このことは、小新聞「かなよみ」が真土事件直後に掲載した続き物『真土村長右衛門謀殺一件』（無署名、明十一・十一・五～十一・十）を見ることでより明確になる。

- ① 暴徒ハ頓て座敷に踏込み（十一・八）
- ② 暴徒ハ鋤鉞まんがにて透もなく滅多打に烟りの中へ押入れバ（十一・九）
- ③ 松木父子ハ倒るゝ処を暴徒ハ先を争ひて恨みを晴らす滅多討（十一・十）
- ④ かほど可愛い子迄捨翌日ハ命を縮むるとハ如何なる宿世の因縁かと猛きこゝろも子故の闇（十一・七）
- ⑤（事件の中心人物と家族の一松原注）離別の情合哀れな所ハ明日委しく（同前）

事件直後のこの続き物は、裁判所が判決を下す前に掲載された。この時点ではまだ、特典は予想されておらず、農民達は厳罰を与えられる運命にあった。したがって①から③にあるように、農民達は「暴徒」と否定的に表現される。一方、④⑤にあるように、事件の中心人物は義民的に描かれる。この続き物もまた事件全体への態度は曖昧なので、『蓆簾群馬嘶』とおなじ事態が生じていると言えよう。特典が付与されたからこそ、『真土酒月畳之松蔭』のような態度が可能になるのである。

四

見てきたように、農民暴動事件を素材とした時事小説『蓆簾群馬嘶』は、裁判所の判決文にその内容をあらかじめ規定されて成立している。事件を肯定的に描くのか、否定的に描くのかという道徳的な判断からして、本作は判決文から自由ではない。明治八年（一八七五）、大審院が設置され、それを最高位とする裁判所の体制（大審院、上等裁判所、府県裁判所）が整えられた⁶⁾。創設されたばかりのこの司法制度が、本作の成立に根本的な影響を及ぼしているのだ。本作は、判決が下される前に出版されながら、また、事件の中心人物を義民的に描きながら、こたびの暴動を断罪するであろう判決文をあらかじめ内容に組み入れて成立しているのである。

実は、判決文が物語世界を拘束するのは、本作に限らず当時の犯罪事件に取材したすべての時事小説に言えることである。別の視点から言えば、明治十年代の時事小説は、もし判決文と齟齬するならばいかなる場合でも自己否定せざるをえなくなるのだ。そして、当時の時事小説が生来的に備えていたであろう、このような性格を⁽⁷⁾、決定的なかたちで顕在化させたのが有名な高橋お伝をめぐる物語群であったと考えられる。

そのうちのひとつ、『毒婦お伝のはなし』（無署名、「東京絵入新聞」明十二・二・一～二一）を見てみたい。本作では、判決文とは異なる内容の物語にしようとして、結局は不自然に物語をねじ曲げなければならなくなる様子が観察できる。

本作は東京裁判所にて判決が下され、斬罪刑が執行された翌日より連載された。つまり、判決文が本作成立に先立って厳然と存在したのである。最終回に付された、高橋お伝に対する判決文を引用する。

そのほう ぎ ごとくきちごう し じ、 おの しよみ あら わね たつ いへどもだい みぎきち
 其方儀後藤吉蔵の死ハ自死にして己れの所為に非ざる旨申立ると雖 第一右吉
 蔵殺害せし云々の書置及び当初警視分署 并に明治十年八月十日 糺問判事に於
 ての供 状 第二医員の 診断書 第三今宮秀太郎の申 供 第四旅店大谷三四郎等の
 申 供 第五宍倉佐七郎の申 述 此 衆 証に依れば自殺にあらざる事明白なりとす
 而して広瀬何某の落胤 或ハ異 母の姉の復讐なりといひ又ハ姉在世の景況及び
 須藤藤次郎等を証拠人といふも果して姉の生 所等 一も認むるべき徴憑なし是
 畢竟名を復讐に托し自ら賊名を匿さんたみに出る遁辞なるものとす此によつ
 て之を見れば徒に艶情を以て吉蔵を欺き財を図るも遂る能はざるより予め殺意
 を起し剃刀を以て殺害し財を得る者と認定す依て右科人命律謀殺第五項に照ら
 し斬罪申付る（二・二一）

判決文では、お伝の供述が虚偽であると明言される。ここではお伝の供述、すなわち被害者後藤吉蔵の死が自殺である点、お伝は広瀬何某の落胤で異母姉がおり、その姉が後藤吉蔵に殺害された点、後藤吉蔵の死が異母姉の復讐にともなうものである点といった供述が「遁辞」とされ、明確に否定される。そして、判決文は、お伝が強盗目的で殺人を犯したと断定するのである。

最終回に右のような判決文が付されるのだが、しかし、当初『毒婦お伝のはなし』はお伝の供述の方を原拠として物語を開始していた。たとえば初回の場面。お伝は自分とおなじく百度参りしている年上の女性といつしか親しくなり、身の上話

をする。

じつ おや ち はん ゑもん そのまえおし ご か ちう あを き しん ぎ ゑもん
 実の親仁の（広瀬一松原注）半右衛門どのが其前忍の御家中で青木新左衛門と
 ひと むすめ しつ なじみ う ま だ こども かね よ え ど める きい
 いふ人の娘のお鎮と馴染になり出産させた子供をお兼と呼び江戸に居とか聞たば
 はら かは げんざい あね どう あ たい し と ころ たより ことさらたづ
 かり腹こそ替れ現在の姉ゆゑ如何か逢ひ度と知らぬ土地の便なさに殊更尋ねて
 を としへ こと すこ このよ ぶ じ を こと たどし しん しまひ
 居りますが年経た事ゆゑ少しも知れず此世に無事で居る事か但し死で仕舞まし
 これ 是もひとつの心 懸とかたるを聞て彼方の婦人が打驚きたるおもゝちにて
 おも まえ さめへなきふし このをんな なにひと あす し
 思ひがけないお前ハマアといひつゝ潜然泣伏たるそも此婦人は何人ぞ明日の紙
 じやう くはしくしる でん かた ながものがたり そば きゝ ゐ ひとり をんな おどろ
 上に委敷記さむ／お伝が語る長物語を側に聞居る一人の婦人がうち驚きたる
 おも それ まえ わたし いもたとづ いで かね げんざいわたし
 面もちにて夫ならお前は私の妹 尋ねてお出のお兼といふハ現在私でござんす
 でん びつくり
 といはれてお伝も吃驚し（後略）（二・一～二）

お伝は自身が広瀬半右衛門の落胤であることを女性に語り、異母姉お兼の存在を打ち明ける。すると偶然にもその女性がお兼であり、二人は再会を喜ぶ。この場面が物語世界内の事実として描かれている点に注意したい。引用文において、お兼はまごうかたなき実在の人物なのである。さらに、彼女の存在がお伝の身の上話を事実と保証する。

しかし、前述のように、広瀬の落胤であることや異母姉がいることは判決文で明確に否定されていた。判決文ではなくお伝の供述を原拠とするとき、本作は現実の事件に取材しているにもかかわらず、自らが虚構であると積極的に表明する必要に迫られたと見られる。連載初回に以下のような序文が付されている。

しる ところ どくふ たて すぢ つた きい とりかざり いつは
 つぎへ記す所ハ毒婦が申立たる筋なりとて伝へ聞しものなれば虚飾たる詐
 おほ そのところ しる そのころ みたま
 りも多かれどそハ其所々に記すべければ其心して見賜ふべし（二・一）

本作にはお伝による虚偽が多く混じっているが、それについては適宜注記していくから、そのつもりで読んでほしいというわけである。このように表明することで、本作は、裁判所という権威に逆らうものではないというアリバイを作ろうとしたに違いない。本作は当初、この方法によって、判決文の否定するお伝供述の物語化を正当化しようとしていた。

しかし、注目すべきことに、たとえ虚構であると断っていても、判決文が否定した内容を語り続けるわけにいかなくなるのだ。本作は次第に、判決文に合わせるべ

く自らをねじ曲げはじめる。

- A 記者きしやいはく毒婦どくふお伝でんが貞操ていさうを守るまもるが如ごとき一言ごんハ其本心そのほんしんを包蔵つみかくせるもとより一ツのたくみにて末すゑに至いたらば自然おのづから其詐偽そのいつはりといふ事ことを詳細つまびらかにする時ときあるべきを看客かんかくそれと推察すいさつしたまへ (二・四)
- B 記者きしやいはく是迄これまでの所ところハお伝でんの申立たてたる廉々かどへにて明日みやうにちより記す代助しる勘右衛門だいすけかんゑもん (お伝おでんの義父ぎふと実父じつふ一松原注いっしょうげんちゆ) の物語ものがたりハまた勘右衛門等かんゑもんとうが其筋そのすぢへ申立たてし趣おもひにて虚実きよじつを識しるは此この一条じゆうにあるべし (二・六)
- C 記者きしやいはく (中略) 勘右衛門かんゑもんが調べしらべによりて申立たてたる実事じつじにてお伝でんの口供こうきゆうに齟齬そごせるは巧たくみに言枉いひまげたるものなること前後ぜんごに照てらして知しりたまふべし (二・九)
- D 記者きしやいはくお伝でんの申立たてにハ後藤吉蔵ごとうきちざうハ横浜よこはまにて内山仙之助うちやません の すけといひし者ものにて姉あねお兼かねを害がいしたりと思おもはるゝ証拠しょうこハ現げんに姉あねが実親じつおや広瀬半右衛門ひろせはんゑもんより相伝さうでんせし短刀たんたうのこづか小柄そのいえの其家あに有ありしを見認みとめ (中略) (記者曰く、しかし一松原注) 夫それハ偽いつはりにて誠まことハ上に記す如ごとくにて (二・十五)

この『毒婦お伝のはなし』には、記者(作者)を名乗る語り手が頻繁に現れる。現れるのは上述の序文を除けば各回末尾に二字下げで付された箇所で、上四点もそこからの引用である。Aでは本文でのお伝の挙動が実は詐欺であると述べられ、Bではこれまでお伝の供述によって物語を書いていたが明日からはほかの者らの証言によると述べられ、Cではその証言の方が「実事」でお伝の供述の方は虚偽であると述べられ、Dではお伝の供述は虚偽で本文に記されていることが「誠」と述べられる。

連載当初は、Aに見られるように、語り手が本文を虚偽と注記していた。このときはまだ、本文の外から本文内容を否定していただけである。これは序文での表明に沿って行われていた。しかし、徐々に、本作は本文からお伝の供述を追放しはじめるのだ。BおよびCで、お伝の供述によらず「実事」によって本文を書くとした後、Dではお伝の供述がついに本文の外に追い払われ、そこで語り手によって明確に否定される。Dになると、語り手は序文での態度をくつつがえし、本文の外でお伝の供述——後藤吉蔵が姉のお兼を殺害した——を紹介した後、これを否定し、本文こそ真実であると表明するのである。そして本作は結局、以下のような本文となってしまう。お伝が後藤吉蔵を殺害する直前の場面から引用する。

お伝でんはおほ後藤まづ吉蔵までを「剃き刀いにて難てくだなく殺もちきたして」(二・十九)しまう。ここではもはやお伝の供述は一切反映されていない。供述によれば、お伝にとって後藤吉蔵は異母姉お兼の仇敵であるのに、さらに、後藤の死は自殺であるのに、それらはまったく無視されるのである。

このとき、異母姉お兼の存在は本文から抹消されてしまい、先の冒頭の場面は意味をなさなくなってしまうのだ。冒頭において物語世界内に確かに実在していたお兼は、「さてはお伝でんが月つき足たらずうまにて生せいれしといふさいはを幸かねひに兼きて聞ききたる話はなし説せつによりてかゝる詐偽いつはりを長なが々へし敷くつく作りつくまうけしものならんとて」(二・十九)とさあらぬ体で処理され、そもそもいなかったことにされてしまう。右の場面に見られるように、本作の本文はもはや完全に判決文に依拠して形成されており、後藤の死をお伝の欲得のみに基づく殺人行為によるものと断定するのである。

『毒婦お伝のはなし』を検討してきたが、裁判所の否定したお伝の供述を原拠として出発しながら、結局は物語全体の一貫性を犠牲にして本文を不自然に曲げてしまうという現象は、岡本起泉『其共名名高高橋橋東京奇聞』(明十二、島鮮堂)⁽⁸⁾にも見られる。本作はお伝を広瀬半右衛門ならぬ「黒瀬勘右衛門」の実娘と設定し物語をはじめめるが、しかし、当初貞婦烈女であったお伝はその後突然、合理的な説明なく毒婦へと変貌する。難病を患った夫との離縁を親に言いつけられた際、「是非ぜいとも離縁りえんとあるならば私わしも共ともに離縁りえんをして下くだされ何処どこ処どこまでも夫をつとに付つきそひ看かん病びやうするが私わしの願ねがひ世間せけんの人ひとと交際まじはりが出来できぬも更さらにいとハぬ」(三編上)と烈しく抗議するほどに凍々しかったお伝は⁽⁹⁾、途中で豹変し、最終的には「お伝ハ脳漿のうみそをはじめ脂肪あぶらさへことたりやうことに多量たじやうありしハ性質せいしつの多情たじやうを知るに足るといへばどくふ毒婦じんじやうの尋常ふじんの婦人ことに異なる所ところあるを以てその履歴の大略を記して世の色に弱るゝ少年の警戒とハなし畢おハぬ」(七編下)と多分に差別的な扱いを受けて終わる。最終編(七編)冒頭に『毒婦お伝のはなし』と同様の判決文を掲げる本作もまた、結局は判決文の論理に物語を収斂するのである。

結果、お伝は後藤吉蔵を「剃刀にて難なく殺して」(二・十九)しまう。ここではもはやお伝の供述は一切反映されていない。供述によれば、お伝にとって後藤吉蔵は異母姉お兼の仇敵であるのに、さらに、後藤の死は自殺であるのに、それらはまったく無視されるのである。

このとき、異母姉お兼の存在は本文から抹消されてしまい、先の冒頭の場面は意味をなさなくなってしまうのだ。冒頭において物語世界内に確かに実在していたお兼は、「さてはお伝が月足らずにて生れしといふを幸ひに兼て聞きたる話説によりてかゝる詐偽を長々敷作りまうけしものならんとて」(二・十九)とさあらぬ体で処理され、そもそもいなかったことにされてしまう。右の場面に見られるように、本作の本文はもはや完全に判決文に依拠して形成されており、後藤の死をお伝の欲得のみに基づく殺人行為によるものと断定するのである。

『毒婦お伝のはなし』を検討してきたが、裁判所の否定したお伝の供述を原拠として出発しながら、結局は物語全体の一貫性を犠牲にして本文を不自然に曲げてしまうという現象は、岡本起泉『其名高橋東京奇聞』(明十二、島鮮堂)⁽⁸⁾にも見られる。本作はお伝を広瀬半右衛門ならぬ「黒瀬勘右衛門」の実娘と設定し物語をはじめめるが、しかし、当初貞婦烈女であったお伝はその後突然、合理的な説明なく毒婦へと変貌する。難病を患った夫との離縁を親に言いつけられた際、「是非とも離縁とあるならば私しも共に離縁をして下され何処処までも夫に付そひ看病するが私しの願ひ世間の人と交際が出来ぬも更にいとハぬ」(三編上)と烈しく抗議するほどに凍々しかったお伝は⁽⁹⁾、途中で豹変し、最終的には「お伝ハ脳漿をはじめ脂肪さへことたりやうに多量ありしハ性質の多情を知るに足るといへば毒婦の尋常の婦人に異なる所あるを以てその履歴の大略を記して世の色に弱るゝ少年の警戒とハなし畢ぬ」(七編下)と多分に差別的な扱いを受けて終わる。最終編(七編)冒頭に『毒婦お伝のはなし』と同様の判決文を掲げる本作もまた、結局は判決文の論理に物語を収斂するのである。

これら『毒婦お伝のはなし』『東京奇聞』とは対照的に、物語冒頭からお伝の供

述を完全に否定して成立したのが、仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』(明十二, 金松堂)⁽¹⁰⁾である。本作では緒言にて「彼口供の如きハ毒婦が狡才詐欺をのみ旨とし現に明々たる法庭を暗冥さんとするに有て遂に其实を告ぐるに至らず」, 「諸新聞に掲載所ろハ毒婦が奸舌の虚に基据て其实际を得る者ならず」(初編上)と、お伝の供述が虚偽であると明言し、同時に判決文を真実として掲載する。こうすることにより、物語の最初から最後まで一貫してお伝を稀代の毒婦として造型し、結果、本作は読者に強烈な印象を植えつけることになったと推される。実際、本作は「お伝に関する他の同出版物を圧倒して、四五千部を売尽したとの事」⁽¹¹⁾とされ、明治毒婦物の代表作と文学史的に評価されている。裁判所の判決文に徹頭徹尾、あくどいまでに準拠した本作の商業的な成功が、同時代の制作者達に、時事小説の書き方を広く知らしめたに違いない。

五

明治十年代の時事小説は判決文に、物語世界を善悪の判断にいたるまで規定されており、もし判決文と齟齬するならばいかなる場合でも自己否定せざるをえない。前節で見た高橋お伝をめぐる物語群は、新聞種を原拠とした小説のそのような性格を同時代に対して顕在化させたのである。

『毒婦お伝のはなし』や『東京奇聞』は物語全体の自然な流れを犠牲にし、途中から自らを判決文に沿うようねじ曲げることによって辛うじて大団円にこぎ着けた。しかし、判決文から決定的に乖離してしまったがゆえに、終局までたどり着けなかった作品もある。たとえば『豊時田秋浪速新雁』(明十二, 錦松堂)や『名広沢辺萍』(明十三, 金松堂)⁽¹²⁾がそれに当たる⁽¹³⁾。両作は中絶を余儀なくされた。

高橋お伝をめぐる物語群は裁判所の判決が下された後に成立していたが、その後、他の版元に先んじて利益を確保するためであろう、判決の前から事件を物語化し出版する例が多くなる。前述の『蓆簷群馬嘶』がそうであったし、『豊時田秋浪速新雁』も『名広沢辺萍』も同様であった。

結論から言えば、『豊時田秋浪速新雁』も『名広沢辺萍』も、刊行途中で容疑者が無罪放免となったために中絶を余儀なくされたのである。前者は明治十二年(一八七九)九月に政商藤田組の関係者藤田伝三郎や中野梧一が贋札製造の嫌疑で逮捕された事件に取材した作品。本作は同年十月に「伝三郎梧一等が邪正の履歴狡奸策を精緻掲載」⁽¹⁴⁾することをうたって初編が発売されたが、その直後に藤田伝三郎達

は無罪放免となる。結果、本作はおそらく初編のみで中絶を余儀なくされた。後者は明治四年の広沢真臣参議暗殺事件に取材した作品。本作は「天地に容ざる大罪人中村六蔵が国事犯の顛末等」⁽¹⁵⁾を描くことをうたって明治十三年二月に初編が発売されたが、その後の三月二二日、無罪判決が中村六蔵に下される。結果、本作は筆禍に遭うと同時に三編で中絶を余儀なくされた⁽¹⁶⁾。

いずれの場合も、作品成立の大前提、すなわち容疑者を犯罪者とする判決文が消滅してしまったゆえに、存在の足場を失い、刊行を続けることが不可能になってしまったのである。両作が物語の途中で立ち消えになったことに関して次のような投書がある。

どこ けんか で い き ひとかすこ とうきやうなれ やう わかもの はなし の き にしきゑ
 何処の県下から出府来た人歟少し東京 馴た様な壮者が咄て居るを聞くに錦画
 くさどし いふもの わかし こ とうきやう めいぶつ わけ くさどし この とくわい かぎ ねん
 草双紙と云物ハ昔から此の東京の名物で分て草双紙ハ此都会に限りて年々
 さい おびたゞし しゆつばん なつ もの きんねんしよしき たか なりぞめ ころ しゆつばん とぎれ ゑ
 歳々 夥敷く出 板に成た物だが近年諸式の貴く成初た頃より出 板も途断て居た
 ところちかごろく ぼ た いふひと ちうこう このせつ さつもの へんつど よみ き
 所 近頃久保田とか云人が中興したとかで此節ハ三冊物の三四編統きて読切り
 なるくさどし だいぶ はやりだ き やう そのい ぜんちやうへん くさどし よ りうかう
 に成草双紙が大分流行出して来た様だが其以前 長 篇の草双紙が世に流行した
 ころしらぬひ じらいや い およ しゆへぎつ た つど もの うりだし かつ み ずるぶん
 頃白縫や自雷也ハ云ふ及はず種々雑多な続き物が発兌になるを買て見たが随分
 しゆかう おもしろ ひろさは つきふぢ た かりなど 唄ゑこれ けつきよく き
 趣向の面白さうな (広沢の月藤田の雁杯でハない) もある故是が結局まで出
 そのさくしや こう み そのたく すぢ あらは ぜ ひきよくちよく はつきり くわんぜんちやう
 たなら其作者の功も見え其巧みな筋も顛れて是非曲 直も判然として勸 善 懲
 あく よ ため こと たのし こうへん で みなまつ め うちはん と たちぎえ
 悪の世の為にもなる事と楽しんで後篇の出るを皆待て居る内半途でドロと立消
 し まふ あつ これ なに はんもと ふ つごう わけ かつ やめ こと か また うちまく
 がして仕舞のが有ては何か板元で不都合の訳でも有て止にした事歟又ハ内幕
 がく や けつきよく つくりあげ こと し せけん かう しまふ
 の楽屋でハ結局まで作上になつた事知らねど世間へハ一向わからずに仕舞
 こと まいど せつかくけんぶつ たのしみに まつ め とごう よ じん
 ふ事が毎度あるが折角看客が刮目して待て居る所あれでハ世の (イヤ) 夜の人
 みん ぎま それほど はじ ひつかう ぐわこう ほんかう なに よ
 眠のねむり覚しにもならず夫程なら初めから筆耕や画工や板行や何やかやと余
 けい く で まつひや し かほ しゆつばん ほう まし ちや ひつきやうさくしや めいよ ぎ
 計な工手間費さずに知らぬ顔で出 板せぬ方が増で有う畢 竟 作者の名誉にも世
 くわんちやう ため つま わけ つぶや ゑ もの ありまし
 の勸 懲の為にもならず詰らぬ訳だと密語いて居た者が在升たが (後略) (「い
 ろは新聞」明十四・四・二一)

本稿冒頭で触れたように、久保田彦作『鳥追阿松海上新話』により小説(草双紙)出版は復活を果たし、これに続いて小説本が次つぎと刊行されるようになった。「其以前」のことと言っているが、引用中の不満——続きが楽しみな内容であるにもかかわらず、大団円を迎えることなく途中で刊行中止となる——の対象は同時代のことであろう。少なくとも、「広沢の月藤田の雁杯でハない」とわざわざ断って

いることから、この投書が『豊時田秋漣新雁』と『名広沢辺萍』を意識していたことは間違いない。投書では中絶の理由を「是ハ何か板元で不都合の訳でも有て止にした事歟」といふかっているが、制作者側がもっとも恐れていたのは無論筆禍であった。判決文から決定的に乖離してしまった物語は、筆禍に遭うか、その前に自主的に中絶を選択するしかない。これが当時の、新聞種となるような事件に取材した小説をとりまく現実だったのである。

以上、新聞種により数多の小説が制作されていた時代に、どのような論理のもとでそれらが成立していたのかを探ってきた。創設されたばかりの裁判体制が、小説制作の現場に根本的な影響を及ぼしていた。明治十年代の時事小説は、すでに判決が下された後に成立したのものだけではなく、判決前のものであっても、つまりすべての場合において、裁判所の判決文にその物語世界を先天的に規定されている。事件を道徳的にどう評価するのかという問題からして、判決文に反旗を翻すような真似はできない。このような意味で、明治十年代の時事小説とは、事実を原拠とした小説というより判決文を原拠とした小説の謂なのである。時事小説の時代とは判決文の時代なのだ。当時、判決文に背反するような内容の物語は存在し続けることさえ不可能となっていた。

明治十年代の中ごろから時事小説よりも時代小説の方が優勢となる⁽¹⁷⁾。これは、小説が物語的な自由を求めて、明治政府の手中にある時代から明治政府が権力を握っていなかった時代（主に江戸期）へと脱出しようとしたことを意味するだろう。一方で、それでも、同時代に取材する小説は書かれ続ける。これらの文学史的動向については別稿にて考察したい。

注

1. 明治初期が事実尊重の時代であることは、興津要『転換期の文学』（一九〇六年、早稲田大学出版部）や柳田泉『明治初期の文学思想』（一九六五年、春秋社）に詳しい。
2. 山田俊治「時事小説の可能性」（『日本近代文学館年誌』四、二〇〇八年）は明治十年代を「時事小説の時代」と指摘している（二三頁）。
3. 時事をあつかった明治戯作の結末のつけ方を論じた先行研究に、山本和明「結末の行方」（『明治国家の精神史的研究』二〇〇八年、以文社）があり、また、時事小説と「事実」との関係性を論じた先行研究に、山田前掲論文がある。本稿ではこれらとは別に、明治十年代における時事小説の制作に一貫して存在した論理を明らかにしたい。
4. 本作の成立事情や位相については拙稿『櫻洲真土迺月暈之松蔭』試論』（『自由民権運動と戯作者』二〇一三年、和泉書院。初出二〇〇九年）を参照されたい。また本稿における

本作梗概はこの拙稿による。

5. 本間久雄は武田交来『冠松真土夜暴動』と『蓆旗群馬嘶』とを比較して、後者を前者より「劣ること数等のもの」とし、その理由に「作者のこの問題に対する態度が極めて不徹底であつて、作中人物に対する作者としての心構へが、或る時は右し、或る時は左してゐる」ことなどを挙げる（『新訂明治文学史』上巻、一九四八年、東京堂、一〇八～一〇九頁）。本稿が問題としたいのはこの「不徹底」が何に起因しているかということである。
6. たとえば牧英正・藤原明久編『日本法制史』（一九九三年、青林書院）三一六～三一八頁を参照。
7. 続き物の嚆矢とされてきた『岩田八十八のはなし』（「東京絵入新聞」明八・十一・二九、三〇）は同年十月二五日に捕縛され、「おきてのには法庭」にて懲役八〇日を宣告された男の来歴を描いている。
8. 初出「東京新聞」明十二・二・一～五・六。
9. この点、平田由美「物語の女・女の物語」（『ジェンダーの日本史』下巻、一九九五年、東京大学出版会）に指摘がある。本稿はこれとは別に、判決文との関係から本作を考えたい。
10. 初出「かなよみ」明十二・二・一～二・二。
11. 野崎左文「『高橋阿伝夜刃譚』と魯文翁」（『増補私の見た明治文壇』第二巻、二〇〇七年、平凡社）一七六頁。初出一九二六年。
12. 初出「いろは新聞」明十三・一・七～四・六。
13. 『豊時田秋漣新雁』については山田前掲論文に、『名広沢辺萍』については佐藤淳「京文舎文京『名広沢辺萍』試論」（『国文論叢』四〇、二〇〇八年）に詳しい。後者は佐藤氏による翻刻（『国文論叢』三九、二〇〇七年）が備わる。
14. 「かなよみ」明十二・十・八。
15. 「いろは新聞」明十三・一・二二。
16. 三月二二日に無罪判決が出た後、四月七日発売の三編が発売禁止となり（「いろは新聞」明十三・四・十三）、続刊は出ていない。初出である新聞連載の方も四月六日をもって中絶となった。なお、佐藤前掲論文は本作について「物語はあらかじめ中村の無罪判決を踏まえていたものと考えられる」（五〇頁）としているが、本稿は見解を異にする。中村六蔵の科白「疾や奸党の巨魁たる広沢参議を暗殺して吾人が無明の迷夢を覚させ世運挽回せんものと多年の素志ハ遂たれば」（三編下）などに見られるように、本作のなかで中村は明らかに広沢参議の暗殺に関与しており、したがって、本作が無罪判決を組み込んでいたとは思えない。
17. たとえば柳田前掲書は、明治十年代中ごろより続き物の徳川文学化がはじまると指摘している（一九八頁以下）。

付記

本稿における引用は、「かなよみ（仮名読新聞）」は明石書店の復刻版、「東京絵入新聞」「いろは新聞」は国立国会図書館のマイクロフィルム、『名立浪竜神於珠』は国立国会図書館（デジタルコレクション）、『新編伊香保土産』『長脇差小鉄乃利刀』『高橋阿伝夜刃譚』は国文学研究資料館（近代画像データベース）、『鳥追阿松海上新話』『今常盤布施譚』『蓆

簇群馬嘶』『名広沢辺萍』は早稲田大学図書館（古典籍総合データベース）、『真土迺月暈之松蔭』は神奈川県立図書館の蔵本、『東京奇聞』は架蔵本による。引用に際して旧字は新字に改めた。斜線は改行を示す。漢字表記、ルビ等に誤りと思われるものもあるが、一部を除いて原文通りとした。なお、本稿の一部は日本近代文学会二〇一二年春季大会（五月二六日、於二松学舎大学）での口頭発表の一部と重なる。